



山手地区への移転の思い出

北海道大学大学院理学研究科助手 内 田 毅

(前 分子構造研究系分子動力学研究部門助手、岡崎統合バイオサイエンスセンター生命環境研究領域助手)

分子研にIMS フェローとして来たのが1998年の4月のことでした。初めてのポストドク先で、二年間必死で頑張ろうと希望に胸をふくらませて来たはずが、気がつけば、途中で一年半の留学期間があったもののIMS フェロー、学振特別研究員、助手と昨年9月に転出するまで、七年間に渡り、岡崎に住むことになりました。学位を取得し、単身で岡崎を訪れた時には、よもや岡崎を離れる時には家族が四人に増えているとは想像もしませんでした。学生時代の指導教官であった森島績先生は「35歳までは死にものぐるいで研究に打ち込みなさい」とよく話されていましたが、学位取得直後の研究者として、また一人の人間として重要な時期をこのようなすばらしい研究環境の中で過ごすことができたことに深く感謝しております。助手に採用された時に北川先生から与えられたテーマは自分の能力不足もあり、遅々として進まず、全く期待はずれの助手であったと今でも心苦しく思うのですが、それとは関係のないテーマを自由にやらせてもらえ、その上、北川先生の強力な後押しのお陰で、任期が切れる前に無事に転出することができたことに対しては、いくら感謝しても足りないほどだと思っています。

助手に採用されたのが2001年の11月で、最初の大きな仕事が山手地区への移転でした。今では五棟からなる立派な研究施設になりましたが、2002年4月の移転の段階では1、2号館の二棟のみで、周りは元の土のグラウンドのままで、初めの一年間は分子研からも管理局からも見放された化外の地のような悲哀を感じましたが、2号館の研究室間では新しい研究組織の立ち上げということで、分子研にい

たとき以上のつながりを感じました。その後、二期工事が終わり、山手地区の住民が倍以上に増えると、そういう雰囲気がほとんどなくなってしまったのは残念でした。研究室の移転の大変さに関しては、以前の分子研レターズにも書かれてありましたが、同じような苦労をしました。移転の前準備、当日、移転後の立ち上げ、とそれぞれ苦労がありました。特に移転当時には大型エレベーターがなく、レーザーや除振台等の多くの装置をクレーンでベランダから搬入する大掛かりな作業でした。ベランダの鍵は山手地区の事務にはなく、明大寺地区まであわてて取りに行ったり、大型クレーン車が、前日の雨でぬかるんだ泥地にはまりこんだり、東門付近で道路陥没させたり、とトラブル続きで大変な思いをしたことが懐かしく思い出されます。新しい研究室の立ち上げにはそれなりの苦労は当然ありましたが、自分の好きなように実験室を作れる、という役得があり、研究を進める上では大きな利点でありました。山手地区に移転しなければ、どこまで仕事ができただのか、と考えると山手地区への移転というのは私の研究人生においては、神風が吹いたようなものでした。

今こうして外から分子研を眺めてみると、改めてその研究環境の素晴らしさに気がつきます。自分がそのような恵まれた環境をどこまで有効に活用できたのかわかりませんが、いつかまたそういう環境で研究できるようになることを一つのモチベーションとして、研究を進めて行きたいと考えています。